

各専攻共通(博士後期課程)

(選択)

国際文化特論 II

言語学特論

戦略的協創イノベーション特論

ドイツ語圏の近代美術史

| | | | | | |
|-------------------|--|--|----------|------|-----|
| 科目名(英訳) | 国際文化特論II(Studies on International Cultures II) | | | | |
| 担当教員 | 伊関敏之 | 対象学年 | 博士後期課程1年 | 単位数 | 2単位 |
| 科目区分 | 講義 選択 | 受講人数 | なし | 開講時期 | 後期 |
| キーワード | 言語学、音声学、音韻論、統語論、意味論、語用論、談話分析、英語教育、歴史言語学 | | | | |
| 授業の概要・ 達成目標 | 現代言語学の枠組みの中で、音声学、音韻論、統語論、意味論、語用論、談話分析、英語教育、歴史言語学などの諸分野に関する基本的な考え方を考察することを主な目的とする。講義においては、なるべく広範囲な分野についての情報を盛り込むように努める。 | | | | |
| 授業内容 | 言語学の理論的な側面に関する文献を精読し、検討する。文献はなるべく英文で書かれたものと和文で書かれたものの両方を用いるように努める。 | | | | |
| 授業形式・形態 及び授業方法 | 毎回、学生に文献の訳読、解説を担当させる。なお、途中で適宜構成メンバー全員でコメントを加えながら授業を進行する。活発な議論が展開されることが期待される。 | | | | |
| 教材・教科書 | 授業開始時に指示する。 | | | | |
| 参考文献 | 授業開始時に指示する。 | | | | |
| 成績評価方法 及び評価基準 | 学期末にレポートを課す。 100点満点で、60点以上を合格とする。 | | | | |
| 必要な授業外学修 | | | | | |
| 履修上の注意 | 「人間学特論I」を履修していることが望ましいが、履修していなくても授業には十分に適應できる。毎回、その時間に集中して、授業に取り組むこと。 | | | | |
| 関連科目 (発展科目) | 人間学特論I | | | | |
| その他 | 学習・教育目標との関連 | 本授業は、北見工業大学の基本目標の1、向上心を喚起し、創造性を育み、将来の夢を拓く教育の項の「人間力教育」の充実に関連する。 | | | |
| | 連絡先・オフィスアワー | 伊関敏之研究室 E-mail:isekito@mail.kitami-it.ac.jp, Tel:0157-26-9553 | | | |
| | コメント | | | | |

| | | | | | |
|---------------|--|--|----------|------|-----|
| 科目名(英訳) | 言語学特論(Advanced Linguistics) | | | | |
| 担当教員 | 戸澤隆広 | 対象学年 | 博士後期課程1年 | 単位数 | 2単位 |
| 科目区分 | 講義 選択 | 受講人数 | 5名 | 開講時期 | 後期 |
| キーワード | 言語学、生成文法 | | | | |
| 授業の概要・達成目標 | 人間はことばを用いて伝達行為を行う。これが可能なのは、人間に生得的言語能力(普遍文法)が備わっているからである。この授業では、英語と日本語における統語論を学びながら、すべての言語に共通する文法を明らかにしようとする。これを通して、理論構築の手法、さらには論理的思考法を身につけることを目指す。 | | | | |
| 授業内容 | 第1回: ガイダンス 第2回: 言語知識について 第3回~第7回: 句構造規則について 第8回~第12回: 変形規則について 第13回~第14回: 格理論について 第15回: まとめ | | | | |
| 授業形式・形態及び授業方法 | 英語で書かれた統語論の文献を精読する。学生にテキストの訳読、解説をしてもらう。授業の準備として、テキストの英文を日本語訳できるようにしておく。適宜、担当箇所の内容をハンドアウトにまとめ、口頭発表もしてもらう。従って、念入りの予習・復習が求められる。 | | | | |
| 教材・教科書 | 授業開始時に指示する。 | | | | |
| 参考文献 | 英和辞典を持参して授業に臨むこと。 | | | | |
| 成績評価方法及び評価基準 | 全ての授業が終わった後、英文のレポートを課す。100点満点で、60点以上を合格とする。 | | | | |
| 必要な授業外学修 | 授業の予習・復習をする。 | | | | |
| 履修上の注意 | 特になし。 | | | | |
| 関連科目(発展科目) | 言語の構造と機能、現代言語学 | | | | |
| その他 | 学習・教育目標 | 教養を身につける。 | | | |
| | 連絡先・オフィスアワー | 戸澤隆広(電話:0157-26-9551, メール:tozawata@mail.kitami-it.ac.jp) | | | |
| | コメント | | | | |

| | | | | | |
|-------------------|--|------|----------|------|-----|
| 科目名(英訳) | 戦略的協創イノベーション特論(Strategic collaborative creation innovation theory) | | | | |
| 担当教員 | 藤井 享 | 対象学年 | 博士後期課程1年 | 単位数 | 2単位 |
| 科目区分 | 講義 選択 | 受講人数 | なし | 開講時期 | 後期 |
| キーワード | 協創戦略・イノベーション・アライアンス・経営戦略・IoTデジタル | | | | |
| 授業の概要・ 達成目標 | <p><講義の概要></p> <p>複雑さを増す企業の競争環境において、企業はIoTデジタル化を進行している。その際、重要となるのは、IoTデジタル・ビジネスを構築する方法(協創)と、様々なステークホルダーとの連携(アライアンス)を戦略的に推進することである。本講義では、IoTデジタル・ビジネスを構築するための協創手法を学修する他、企業の競争力を高めるためのアライアンス戦略の「理論」と「実践」を学修する。</p> <p><到達目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・IoTデジタル・ビジネスを構築する方法(協創)の仕組みを習得する。 ・戦略的提携(アライアンス)の「理論」と「実践」について学修する。 ・企業において協創ビジネスを構築するクリエイターの育成を目標とする。 | | | | |
| 授業内容 | 第1回 ガイダンス(自己紹介、講義の進め方他) 第2回 超スマート社会の描く未来社会像 第3回 IoTデジタル・ビジネスの構築手法(理論) 第4回 IoTデジタル・ビジネスの構築手法(実践) 第5回 戦略的企業提携(アライアンス)の定義・理論・分類・形態 第6回 戦略的アライアンス・マトリックス 第7回 アライアンスの事例研究 第8回 アライアンスと企業競争力 第9回 パートナーの選定・条件の交渉・契約締結 第10回 アライアンス・ガバナンスの設計 第11回 プロジェクトの運営とアライアンス能力 第12回 アライアンスの終結と評価 第13回 合弁会社・M&A 第14回 グローバル・アライアンス 第15回 まとめ | | | | |
| 授業形式・形態 及び授業方法 | 講師オリジナルの講義資料を使用し、講義(一部演習)方式で行う。 | | | | |
| 教材・教科書 | 安田洋史(2016)『新版 アライアンス戦略論』NTT出版 | | | | |
| 参考文献 | 野本遼平(2020)『戦略策定・交渉・契約・実行がわかる 成功するアライアンス 戦略と実務』日本実業出版社 他 | | | | |
| 成績評価方法 及び評価基準 | 7割以上出席した学生にのみ評価判定を行う。平常点(授業への参加度・発言)40点と期末レポート60点の合計で60点以上を合格とする。 | | | | |
| 必要な授業外学修 | | | | | |
| 履修上の注意 | マネジメント(経営学)の基本的な知識を有することが望ましい。 | | | | |
| 関連科目 (発展科目) | | | | | |
| その 他 | 学習・教育目標 連絡先・オフィスアワー コメント | | | | |
| | 藤井享(電話:0157-26-4168 メール:roru-fujii@mail.kitami-it.ac.jp) | | | | |

| | | | | | |
|-------------------|--|---|----------|------|-----|
| 科目名(英訳) | ドイツ語圏の近代美術史(Modern art history of Germany, Austria and switzerland) | | | | |
| 担当教員 | 野田 由美意 | 対象学年 | 博士後期課程1年 | 単位数 | 2単位 |
| 科目区分 | 講義・演習 選択 | 受講人数 | なし | 開講時期 | 後期 |
| キーワード | ドイツ、近代美術史 | | | | |
| 授業の概要・ 達成目標 | 1871年のドイツ帝国発足から第二次世界大戦終結までを中心としたドイツの美術を(オーストリアやスイスも含めて)、社会の状況やその当時作家たちが関心を持った様々な領域と照らし合わせながら論ずる。教員の説明から、ディスカッションに発展させる。ドイツ近代美術がどのような問題を抱え、どのように発展し、またナチスによって弾圧されるに至ったのかについて考察を深める。さらに、戦後ドイツの美術における過去との取り組み、新たな美術の歩みを視野に入れつつ、現在私たちがその歴史を振り返る意義を確認する。 | | | | |
| 授業内容 | <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション: 授業の説明 2. ロマン派から印象派へ: フランスとイギリスとの比較から 3. 印象派から分離派へ: 分離派結成の歴史 4. ユーゲントシュティール: 19世紀末工芸 5. ブリュッケ(1): 表現主義の特性 6. ブリュッケ(2): ブリュッケの活動について 7. 青騎士の誕生(1): フランス近代美術の受容をめぐる問題 8. 青騎士の誕生(2): その歴史 9. 抽象絵画の探求(1): フランスとの比較から 10. 抽象絵画の探求(2): その音楽・文学への接近について 11. ダダとノイエ・ザハリヒカイト: 第一次世界大戦～1920年代の表象 12. ドイツ工作連盟からバウハウスへ: インダストリアル・デザインの探求 13. ナチスの美術政策: 「退廃芸術展」と「大ドイツ芸術展」 14. 戦後のドイツ美術: 過去との取り組み 15. まとめ | | | | |
| 授業形式・形態 及び授業方法 | 講義、演習 | | | | |
| 教材・教科書 | 教科書は指定しない。1課ごとに資料を配布 | | | | |
| 参考文献 | 千足伸行他『新西洋美術史』西村書店、1999年。坂井榮八郎『ドイツ史10講』岩波書店、2003年。 | | | | |
| 成績評価方法 及び評価基準 | レポート10割で評価。全授業回数の2/3以上出席しなければ、「出席不足」となる。 | | | | |
| 必要な授業外学修 | | | | | |
| 履修上の注意 | 合格点に至らなかった場合、再レポートや再テスト等を行わない。救済措置はなし。 | | | | |
| 関連科目 (発展科目) | | | | | |
| その 他 | 学習・教育目標 | | | | |
| | 連絡先・オフィスアワー | まずはメールかコースパワーで連絡すること。ynoda@mail.kitami-it.ac.jp | | | |
| | コメント | 美術やドイツの近代史に興味があると望ましい。 | | | |